

の局處療法の如きは解剖學を基礎として術者の經驗を積むに任せて其欲する處に求めて可なるべし

(一) 頸部

第一位點 第一頸椎と第二頸椎或は第二第三頸椎の横突起間にして棘状突起を去る左右一拇指の處にして淺層(分五)なる時は頸椎神經により反射的に迷走神經の心臟制止神經を刺戟し深層(以上)なる時は交感神經上頸神經節を刺戟し心臟の鼓舞作用を呈す  
第二位點 第四頸椎と第五頸椎との兩側横突起間即ち棘状突起より一拇指左右に開く處に是を求め交感神經中頸神經節を刺戟するの目的にして淺層なるときは第一位點の如く頸椎神經により反射的に迷走神經の心臟制止作用を呈し第一位點と其效用相等し

第三位點 第六第七頸椎又は第七頸椎と第一背椎との兩側に於て上下横突起間を目的とす是を探ぐるに第七頸椎(大)の棘状突起を標準となすべし即ち外後頭結節より肩胛間に至るの間に於て最も隆起して觸るゝ突起是れなり其淺層(分五七)手術は肩背の諸筋及び腦に對する誘導法として是を行ひ深層(寸約一)手術は頸の交感神經下頸神經節及び下頸叢の一部を刺戟するの目的なり  
第四位點 即ち副點は後頭骨の直下乳嘴突起の後方上約五分の處陷凹せる部(風池)にして淺刺す是れ頸椎神經より腦神經に對する反射作用を目的とせり  
尙ほ上記の外に頸部の刺點は局處の疼痛筋肉の痙攣麻痺癱瘓室斯及び腦疾患に對し頸椎神經より反射的に或は誘導的に又は直接刺戟法として廣く應用せらる可し

(二)腰部

第一位點 第十二背椎と第一腰椎(胃俞)或は第一第二の腰椎横突起間(三焦俞)にして(鍼尖少しく内上方に向け)深層(二寸)は太陽叢及び大小内臓神経の枝別に刺戟の傳搬を計る目的にして淺層(一寸)なるごきは腰椎上位神経を目的とす

第二位點 第二第三腰椎棘状突起の兩側上下横突起間(腎俞)にして棘状突起より約一寸左右に開きし處即ち薦骨脊柱筋部に求め深層(寸)なるごきは腰椎神経を目的とす

第三位點 第三第四腰椎横突起間(氣海俞)にして棘状突起より約一寸左右に開きし處即ち薦骨脊柱筋部に求め深層(寸)は専ら腹部動脈幹叢及び下腸間膜叢を目的とせり而して腰椎神経を目的とす

する場合には淺刺(分五)す

第四位點 第四第五腰椎横突起間(大腸俞)又は第五腰椎横突起と薦骨翼との中間(關元俞)にして同じく棘状突起より約一寸左右に開らきし處とし下腹叢に對する目的を以て何れも深層(二寸)鍼なり又腰椎神経及び薦骨枝を目的とせば淺刺す

第五位點 第一乃至第四後薦骨孔(八竅)中にして薦骨神経及び直接刺戟を與へ或は内臓疾患に對して或は反射的或は誘導の目的にも應用すること極めて多し

(三)上肢

第一位點 前膊部前面の正中線に於ける中央部にして長掌筋の

中部即ち郅門に是を求め正中神經を目的とす

第二位點 橈骨小頭の下方に向つて去る凡そ一寸五分の處

橈骨筋上端の部位に於て橈骨神經及び外膊皮下神經を目的とし

即ち三里に刺點を求む

第三位點 拇指と示指との骨間即ち第一掌骨と第二掌骨との骨

間の中央部の即ち合谷に是を求む是れ即ち橈骨神經前枝の手背

枝を目的とせり蓋し前項の三里と本點とは共に能く腦疾患に對

する誘導法及び反射的作用等に應用すべき要點とせり

(四)下肢

第一位點 坐骨結節と大轉子との中間にして其中央部の指壓し

て稍や抗抵の少なき部位(約環跳)を探りて刺點とす是れ坐骨神經

の起根部なるを以てなり

第二位點 前脛骨筋と長總趾伸筋との起始間に於て長總趾伸筋

に倚す是れ脛骨上端と腓骨上端との關節の約一寸五分下方の稍

や内側に寄りたる處即ち三里に刺點を求む是れ深腓骨神經に刺

戟を與ふるものなり

第三位點 下脛内踝の上二寸五分の處即ち内踝の一握上の示指

上縁に於て脛骨の後縁長總趾屈筋の後側即ち三陰交に刺點を求

む是れ坐骨神經の一系列たる脛骨神經の下端に當り同神經及び内

外足蹠神經に刺戟を與ふるを目的とせり

以上の諸點も又腦疾患及び腹部内臓の疾患等に對する反射的又

は誘導の目的に往々應用し或は同じく處領の神經痛筋肉の痙攣

麻痺等に直接刺戟法として往々應用すべし

以上は施術上重要な手術點として其規範を示せるものに過ぎ

ず上述の如く素より筋神經等の分佈の状態に對照し臨機應症の刺點等は種々あるべし然れども這は爰に略し病理學編に於て各病門に就て一々適當の刺點を詳記すべし

### 第十九 鍼術業務上の注意

鍼術を施さむとするものは左の各項に注意する事極めて緊要なりとす

(一) 施術に際せば上記の刺鍼の注意と題せる條項及び鍼體の検査は勿論豫め既往の病狀并に現症を望問し其何病たるやを鑑別し施術効顯ありと認むるものは是を施し若し無害無効或は有害無効なるものと認むる禁忌症又は不適應症なるときは其旨患者に教示し辭して手術を施さず深く其取捨撰擇に注意すべし

(二) 刺鍼の効果疑はしきか或は効あるも尙ほ他の療法を加へざれば全癒せず或は病勢増進し患者の不幸を招く虞れありと認むるものには直ちに其旨患者又は家族に諭して速に適當の療法を勸告し猥りに刺鍼に委ね或は強て施鍼を勸誘すべからず

(三) 鍼治の効顯を貪り徒らに時日を延長せしめ遂に醫療時期をも誤り患者をして不幸に陥らしむるが如き所爲あるべからず

(四) 施術上醫師の業體を模倣し或は藥劑を投與し又は藥方を指示し或は他の治療法を併用する等決して法規に由りて定められたる權限外の所爲あるべからず

(五) 施術せんとする時は豫め患者の體質の肥瘦其他營養の良否を考查し鍼の撰別及び刺戟の強弱緩急に注意し禁忌とする部位を避け又は禁忌にあらざる部位と雖も解剖學及び生理學上危険と

認めたる部位には決して施鍼すべからず

(六)例へ一鍼一灸と雖も空しくせず常に解剖學、生理學は勿論、病理學、診斷學等を基礎とし徒らに暗中摸索をなすが如き所爲あるべからず

(七)施術者及び鍼器は勿論、施鍼部位は消毒法に記述せるが如く規定の消毒薬を以て各々消毒を確實に施行し決して是を等閑に附すべからず

## 第二章 灸治

### 第一 灸の種類及び方法

灸治も本書巻頭の沿革史に記載せるが如く唐の醫法と共に我國に輸入し平安朝時代(今を去る一千年前)より行はれたるものにして鎌倉時代に室町時代に至るまで主に癰疽、疔瘡、癩癧、瘰癧等瘡瘍を治するに用ひられたり、又紀藩醫員の武部子藝氏は「發泡打膿考」を著し其書中に發泡打膿の法は藥力に依りて其部分に運動の機轉を施し諸官の閉塞を開發するものにして其術は從來常用する處の艾灸にて膿を醸すを良とす

「ヨコネガヘシ」ウチヌキ等の灸治は全く打膿術なりとあるが如く

多く外科醫療中にも用ひたれども中古に至り専ら内科的醫術に應用せられ現代醫學の進歩發展其停まる處を知らざるの間に在りて尙ほ此灸治は療屬の一として盛んに現時に於て一般に賞用せらる

今其種類を大別すれば艾灸に在りては有癥痕灸治及び無癥痕灸治の別あり其他水灸墨灸膝灸等の類ありと雖も民間に用ひらるるは多く有癥痕灸なりとす

(一)有癥痕灸治 此は艾葉を通常は圓錐形に麥粒大の大きさに指頭を以て捻りて艾炷となし是を皮膚上に墨汁を以て定めたる灸點部に置き線香の火を貼じて溫熱を與へ是に由りて皮膚面に一の火傷をなさしめ此部は爲めに壞死に陥り以て癥痕を殘存せしむる處の方法を云ふものにして自然化膿せし場合は其癥痕は稍や

大なるべし

(二)無癥痕灸治 此は其種類一定せず或は檜杓或は火熨斗の如き或は圓筒狀の形狀を爲せる金屬製器中に艾を入れ是を燃燒し使用せるものあり或は懷爐灰の如き形狀の厚き紙袋に艾を詰め込み此一方を燃燒し紙又は脱脂綿若くは布片を隔てて間接に高下の溫熱を自在に皮膚に與ふるの療法にして艾葉を使用し皮膚に火傷するが如き癥痕を遺留せざるものを云ふ

(三)水灸 此は一は龍腦一匁酒精適宜薄荷腦二匁の三品又は礪砂精一匁白礬一匁樟腦二匁の三品を何れも混和溶解せしめ是を筆軸又は細棒を以て手術點に塗附するものにして一は濕したる日本紙を數枚重ねて皮膚上に置き其上に艾を薄く平に展べ是に點火して緩和なる溫刺戟を皮膚に與ふるの方法を云ふ

(四) 墨灸　こは黃柏五匁に水一合を入れ緩火を以て五匁に煎じ詰  
め此汁を以て和墨を摺り濃液となりたるを度こし此液汁中へ麝  
墨一匁龍腦二匁米の粉二匁を混じ能く攪拌し是を筆軸にて手術  
點に塗附し或は麝香一匁煤煙適宜ヒマシ油適宜龍腦一匁を能く  
混和調製して艾に浸潤せしめ是を小豆大に丸めて手術點に置き  
其上に艾灸を點ずる方法を云ふ

(五) 漆灸　こは生漆十滴ヒマシ油適宜樟腦油十滴を能く混和し晒  
艾に含ませしめ恰かも肉池の如き程度に製し或は黃柏の煎汁中へ  
乾漆十匁明礬十匁樟腦五匁を粉末こし是を混和して黃柏の煎汁  
にて適宜の艾に浸潤せしめ兩者共に是を小さき箸の如きもの  
先にて手術點に塗附するの方法を云ふ

### 第二 艾葉

艾葉は一にもぐさご稱しし燃草の畧義なりご云ふ素ご是れ蓬の葉  
を乾燥し是を日光に晒して精製したるものにして其種類に散艾  
及び切艾の別あり而して斯業家に在りては普通散艾を使用すご  
雖も民間に於ては使用し易きが故に多くは切艾を用ふ古來より  
艾葉は伊吹もぐさを以て最上ごなしたり蓋し下野國都賀郡標茅  
原に於て産するものなり  
小野蘭山氏の「本草譯説」に艾は「よもぎ」「よこみ」「さしもぐさ」「紅毛」ある  
こみしや等ご云ひ又「肚裏屏風病草」「羊茸」「女麴」云へり或人は是を分  
析したるに艾屬の植物には芳香性の苦味質若干を含む是を「アヒ  
ルレイン」云ふ其他二種の苦味ある揮發油あり是を「イウアイン」

及び「モスカチン」名け共に帶黃綠色の油にして芳香を放ち薄荷に似たる味ありて其原素は酸素一容水素二十容炭素十二容より生成せる事を知れり元來専門灸治家の日常使用せる艾葉は古きものを良こそせり是れ古きものは火勢温々冬日の如く新鮮なるものにして稍や乾燥鈍きものは火勢猛烈夏日の如きが故に一般是を排斥す昔孟子も七年の病に三年の艾を求めたりと云へり

### 第三 灸の大小及び壯數

灸の大小及び壯數は刺鍼の淺深及び刺戟の度あるごと同じく各病症又は體質の強弱肥瘦并に營養の良否を考へ且つ年齢・幼老に従つて其壯數・大小を斟酌せざるべからず若し大小を誤り其度宜しきを得ず猥りに壯數を重ね同一部位の刺戟を持重するが如き事

あらば鍼に於けるが如く遂に神經纖維は其傳導作用を減弱し施術亦無効に歸するのみならず却つて危害を醸すこと又無きに非ざるべし

古説に灸炷三分ならざれば火氣兪穴に達する能はずして病癒へずと云へり然れども中年及び小兒又は虛弱なるものにおいてはその大小壯數を斟酌せざれば火熱に堪へ難く或は疲勞を覺ゆることあるを以て灸炷は成るべく小(鼠糞麥粒の大)なるを良とし代ふるに壯數を増加せしむ可し而して顔面頸部の如き總て外表に現はるゝ部位に有癥痕灸を施し癥痕を遺留し或は灸治部より化膿菌侵入し化膿するが如きことあらば人類間に於ける所謂自然の美を失はしむる嫌あるを以て往々婦人の如きは是を嫌忌す故に是等の部位は寧ろ艾灸を避け代ふに鍼術又は無癥痕灸治を以てすべし



### 第四 灸治の作用

灸治は温熱的神經刺激の一にして、鍼術に於けるが如く均しく神經機能の變常を調節し、血行の變常を調整せしむる處の作用を有し、多く誘導法に應用せられ、又直接及び反射的刺戟法にも應用せらるべし。こ雖も或る説に依れば、理學的に温と共に燃液(艾葉)を身體組織中に吸收せられ、以て或る化學的作用をなすものなり。こ云へり、然れども果して信すべきや否や、未だ斷じ難し。這は他日の研究を待たん。

(一)誘導法 此は患部より隔たりたる部位に施灸し、其末梢神經を刺戟し、以て其部に誘導するの法にして、例令ば充血性頭痛に對して、肩部背部或は四肢の末梢に施灸し、此部の毛細血管を擴張せし

め、腦の血量を減少せしむるが如く、或は子宮機能の興進に因る疼痛に對して、腰部或は下肢末梢部に施灸し、此部の血管を擴張せしめ、而して下腹動脈に異状を起さしむるが如く、或は深部の充血炎症に對し、其近傍に施灸し、表在毛細管を擴張して、恰かも醫療に於て種々なる發泡膏を貼用し、或は芥子泥療法を用ゆるこ、其理を同じくするもの、如し。

(二)直接刺戟 此は疾患ある局部に施灸するの法にして、其部の知覺神經枝に刺戟を與ふれば、刺すが如く衝くが如き疼痛を感じ、求心性により、中樞に傳達し、中樞細胞は爲めに興奮を起し、更に反射的遠心性により、末梢に向つて傳搬し、以て局部の血管著しく擴張すべし。從つて血液の灌漑旺盛し、組織の新陳代謝盛となるを以て、浮腫及び炎症性疾患に對しては、滲出物の吸収を強め、疼痛麻痺、知

覺異狀鈍麻せるものゝ如き其神經變狀せるものを正復せしむるを云ふ

(三)反射作用　こは直接患部に刺戟を與ふる能はざる即ち内臓疾患の如き或は深在神經の如きに對し解剖的器官の配置を考へ其中樞又は患部に偏せる處に施灸し間接に刺戟を與ふるの法にして例令ば胃の消化作用減衰せるに對し第六乃至第十一背椎神經を刺戟し或は腎臟の分泌機能の減弱に對して上位腰椎神經を刺戟し反射的に各處領の交感神經に刺戟を傳搬し其興奮を發起せしむるが如く或は坐骨神經痛に對し第五腰椎神經及び薦骨神經或は脛骨神經(三陰)深腓骨神經(三陽)等の知覺神經枝を刺戟し求心性により運動神經枝に刺戟を傳導し反射的に遠心性作用を惹起して其神經變狀を正調せしむるが如きを云ふ

灸治は實に前述の如き作用あるものにして而かも其應用汎く醫家の發泡膏及び芥子泥の貼用其他溫熱を利用する溫泉浴蒸氣浴乾燥熱氣浴或は溫奄法湯タンボ懷爐熱砂等の療法に比し灸治の種類及び壯數又は方法の如何により一局處に適當の溫熱刺戟を與へ而かも短時間にて比較的深部に影響を及ぼすを得べく從つて其効果に至つても亦顯著なるものごとす  
近時東京帝國醫科大學に於て樫田原田兩醫學士の動物屍體及び患者に施せる灸治試験の成績に依れば其概畧左の如し  
(一)石綿板上に電溫計の金屬線の接合部を置き其上に鶏卵大凡そ四グラム)の艾を燃焼したるに第一回は五百七十度第二回は五百六十度を示せり又艾の燃焼せる溫度は水銀槽部の周圍に於て攝氏の三百六十度以上の熱度を有し且つ肉片を三十七度に溫め其

上に電溫計の金屬接合部を置き巨大艾炷を其直上にて燃燒し前後四回の平均溫度は二百九十度なり

又家兔の腹部の毛を剃りて其部に艾灸し寒暖計にて計るときは平均巨大艾にて二百度、大切艾にて九十三度五分、中切艾にて八十二度五分、中小切艾にて六十二度五分、小切艾にて六十一度なりきされど生物に在りては其溫度比較的低きは是れ血液が絶へず溫を奪ひ去るが爲めなるべし

尙ほ艾炷の大小及び品質の良否に依りて溫度の高低に少なからざる差異を生ずるに至るべし

(二) 熱の及ぼす深さは巨大の艾炷を以て家兔に施灸せしに約二・三センチメートルにして二・七センチメートルまでに幾分か影響するが如し

(三) 點火と同時に局處の白血球は増加すれども灸の直後即ち三分間以内にて白血球の増加は多き時は二倍に達し少くも三十四%の増加を見るべし、是に反し赤血球は増加する場合と却つて減少する場合とあり、然れども又白血球の増加は化膿するにあらずれば數時間内に消散す

(四) 血管に及ぼす作用は刺戟の強弱に關するものにして、鍼治法と同一く刺戟弱きときは始め血管收縮せしめ後ち是を擴張し其周圍は擴張して著しき充血を呈す

(五) 血壓は點灸と共に上昇す

(六) 呼吸は表在的にして迅速なる

(七) 腸蠕動の旺盛なれるものには明かに減少するを見る

是れ灸治法に關する學理的試験の嚆矢、先鞭者にして此成績に徴

するも其作用著明にして適症を撰ぶときは疾病を治し若くは是れを輕快ならしむる事は炳こして火を睹るよりも明かなりとす

### 第五 施灸部の組織的變化

灸治を施したる局部の皮膚は火傷の爲めに表面は壞死に陥り且つ少しく隆起し後ち痂皮の下に肉芽を形成して癩痕治癒を營むべし而して此癩痕は初め赤褐色を呈すれども時日の経過するに従ひて漸次灰白色或は白斑に變ず是を鏡檢すれば表皮は固有の構造を失ひ單に平滑なる表面を呈して被覆するに止まり乳頭毛囊・汗腺の排泄管・知覺神經末梢の一部等は一時悉く破壊せられて消失し爲めに皮膚の厚さは減少し且つ知覺鈍麻或は知覺脱出すべし而して麻痺したる知覺部は時日を経過すれば再び神經纖維

を再生して知覺を回復するに至る、されば灸痕部に施鍼するときは皮膚破壊せられたるに依り從ふて皮膚は彈力殆んど消失せるを以て鍼の刺入極めて固く且つ著しく疼痛を感ずべし又施灸部不潔なる膏藥を數日貼用せば中に膿及び壞死性物質を充實し且つ筋層をも侵して一部分の破壊するに至るべし

### 第六 灸治の効用

灸治は前項既記せしが如く直接誘導及び反射の三刺戟作用を有するに依つて其刺戟或は中樞に導き或は末梢に誘導し以て其中樞機能及び末梢機能を催進し或は鎮靜する等の働きを發起し諸器官の運動腺分泌滲出物の吸收及び血行を旺盛ならしめ營養等の機能に對して能く調理するものなり故に一般神經痛麻痺神經

系消化不良或は關節炎の如き或は一局處の筋肉炎の如き又はリ  
 ヨウマチスの如き其他總て充血に因する疾病等より起れる炎症  
 性滲出物等の吸収を促がし又は或る種の新生物の癒合を促進し  
 就中官能的諸神經機能の變常に因る疾患に對して最も顯著の効  
 あるものなり既に「内經」にも湯藥攻其内鍼灸攻其外即病無所逃矣  
 の語あり又「千金方」には其有須鍼者即鍼刺以補瀉之不宜鍼者直灸  
 之云々若鍼而不灸灸而不鍼皆非良醫也鍼灸而不藥藥不鍼灸尤非  
 良醫也と記し灸法と鍼術とは相併せて治病の要術たることを説  
 き吾が大寶令にも鍼術灸治の法と並び稱して是を鍼科の中に入  
 れたり其孔穴主治等に至るも鍼術に於けるも稍や相似たり唯だ  
 場合に應じて少しく禁忌を異にするの差あるのみ云々とあり斯  
 學者たるもの亦た以て鑑とすに足るべし

### 第七 灸點の取穴法

灸を點ずる部位即ち孔穴(又俞穴)を定むるに刺鍼點の取穴法と均  
 しく古來凡て經穴に依りたるものなるは前條「刺鍼點」の項に於て  
 仔細に記述する處の如し是に由りて是を用ゆるも其理を推究す  
 る能はざるにより唯だ學者をして徒らに煩悶せしむること多き  
 のみ故に著者は刺鍼點を定めたるごとく同く猥りに經穴のみ墨守  
 せず灸點の取穴法も又解剖學に基づき骨筋内臟等の位置形狀及  
 び血管神經分佈の状態并に中樞部の位置末梢神經の裝置其他諸  
 臟器等の關係を經こし生理學上の作用を緯こなし以て其依る處  
 の理を詳かに究め以て取穴する方法としぬ然れども現在點灸  
 するに依然經穴を主とする部位又尠なしとせず寧ろ多く是に準

據しつゝあり且つ其効驗に至つても經穴の部位に由つて驚くべき處あり是れ著者の猥りに是を放棄し排斥せざる所以なりされご經穴のみに由りて取穴の標準并に治病の理を明らかにする能はざれば是を筆にし是を口にして其理由を理解亦説明し能はざるの憾みあり故に經穴をして解剖生理學に對照して其理を推究せば新舊の兩説相一致し理論又明確にするを得べく以て是を實地に應用するに至らば其得る處蓋し尠からざるべし是れ所謂溫故知新の謂なり學者須らく能く古書を涉獵參照すべし

### 第八 灸治の禁忌症及び禁忌點

灸治の禁忌症とは施灸効を奏せざるのみならず鍼術と同じく有害無効なるべき疾病を云ふ即ち一般傳染病は勿論急性腹膜炎及

び盲腸炎又は瘡瘍等の局處施灸の如き或は創傷の如きは深く警戒し禁すべきものなり是を歴史に鑑みるも既に織田氏豊臣氏時代の外科醫學中にも鍼灸の術は是を施すに注意を要す腫物(癭瘤)コブには漫に鍼灸すべからず風毒腫の初期に鍼灸し頭及び頸の瘡瘍に鍼灸することを禁すべし云々あり

又禁灸の部位は鍼術と異なり何れの部位に施すも敢て大害なしご雖も頭部・喉頭部・心臓部及び外部に現はるゝ處の顔面部・手指の如き或は妊婦・産婦又は妊娠の疑ある者等に對しては猥りに下腹部に施灸することを避くべし其他惡性の新生物及び皮膚に變化ある部は努めて點灸を禁すべし然れども學理詳にして經驗に富みたる者は臨機の療法を施すも敢て危害を招くが如きことなきのみならず又偉大の効果を奏すべきことあるべし蓋し經穴學に

示せる禁灸穴の如きは宜しく解剖的關係を對照し慎重注意して  
取捨すべきなり

### 第九 灸治の適應症及不適應症

灸治の適應症とは常に施灸して其効顯著しく且つ確實なる疾病  
并に症候を云ふ是れ鍼術と其要大同小異なり即ち諸種の官能的  
神經機能の變常に由り起る腦及び脊髓神經の興奮に因る過敏疼  
痛・痙攣・搐搦或は其減弱に因りて發する麻痺・知覺異狀・鈍麻及び内  
臟機能の旺盛又は減衰に由りて發するもの等にありと雖も亦一  
局處の充血或は炎症性滲出物及び腫脹・水腫・リヨウマチス・脚氣或  
は慢性消化器病・呼吸器病等に對し最も特異の効驗あるものなり  
灸治の不適應症とは是れ又鍼治と同じく灸治を施すも只に無効

に屬するのみならず時に障害を醸すが如き疾患を云ふ即ち皮膚  
病・發疹病・熱性諸病・傳染病及び創傷部・寄生蟲其他概して機質に大  
なる變化ある疾病等は是に屬すべきものなりとす

## 附 録

### 鍼灸術の免疫學的効果

鍼術及び灸術の作用に就ては前項に於て既に詳細縷述したる處  
なるが、輒近免疫學の勃興に連れて諸學者の此方面に研究を進む  
る者相次で現はれ其効果も亦大いに見るべきものあれば左に其

梗概を紹介せん

免疫學は細菌學の一種にして身體の細菌襲撃に對して力戰奮闘する状態を究むる學科なり凡そ人體は生れながらにして外襲に對し一定の防禦力を有し殊に最も頻繁に吾人を襲ふ處の細菌に對しては是を撲滅する處の物質を血液中に含有し以て其罹患を防ぐものにして斯の如き特性を免疫性と名く此免疫性は既に先天性に備はれるのみならず又後天性にも是を享有し得るものにして彼の種痘法は實に此後天性免疫の好模範にして是に由りて天然痘病原體を撲滅し得る性能を身體に賦與し以て其感染を豫防するものなり

我が鍼灸術は尙ほ未だ學理的根據薄弱の感あるに似たるも而かも從來の實驗的効果を輓近の學理に照せば亦鍼灸術も斯の如き

免疫性を増進せしむべき作用を有するものにして即ち中條資俊・境田等兩氏は癩病患者の病竈部に點灸して癩菌に對する免疫性を増進して是を治癒せしめ藤井秀二氏は鍼灸の刺戟に由りて血液中に於ける諸種の免疫質白血球及び種々の殺菌性物質の増量することを發見し是に由りて鍼灸の效果の理由に向つて一新知見を開拓せり素より是等の研究は未だ其道程にあるものにして吾人の屢々實驗する炎症性疾患に對する鍼灸術の効驗の如きも其原因の多くは細菌に起因する點より見て其効果も亦免疫性の増進に由來するものと思惟せらるべし

爰に聊か現今斯學の趨勢を述べて讀者諸君の參考に供す



鍼灸學後編(終)

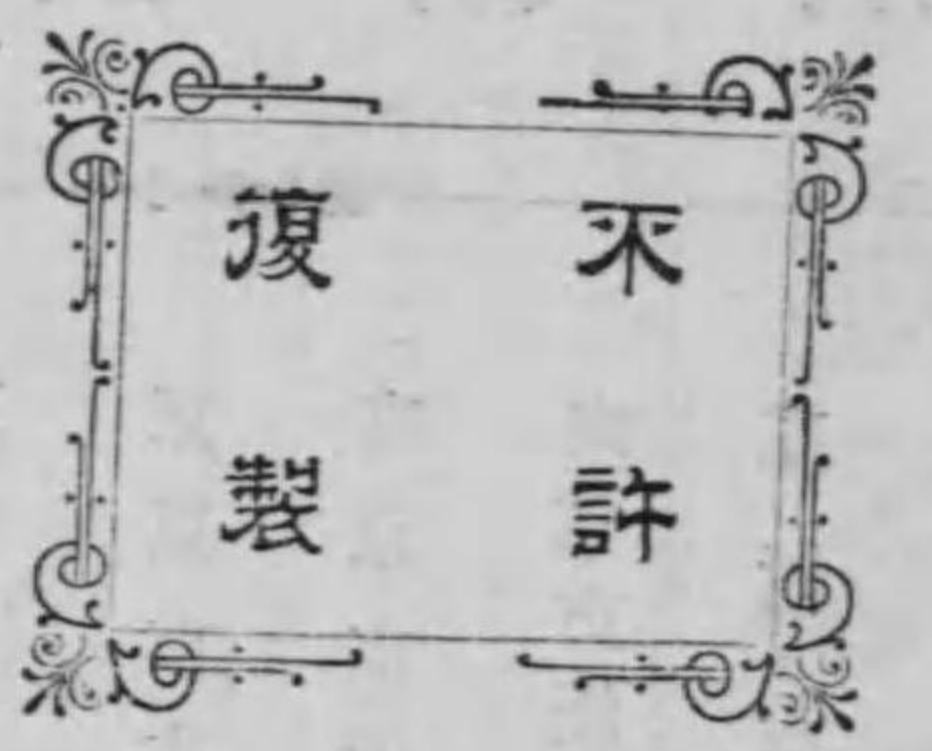
大正二年二月八日發行  
大正四年十二月廿八日再發行  
大正五年一月十一日再發行

正價壹圓七十錢

著作兼發行者 山本新

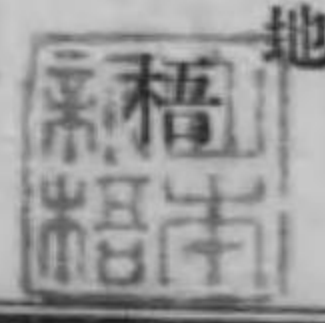
印刷者 荒木佐兵衛

印刷所 全所 浩進舍



發行所

大阪市西區江戶堀下通三丁目三十九番地  
認可  
私立關西鍼灸學院出版部  
振替貯金口座(大阪)一八四八七番



# 大 賣 捌 所

- |                |            |
|----------------|------------|
| 大阪市南區心齋橋一丁目    | 文海堂松村九兵衛   |
| 大阪市東區博勞町四丁目    | 丸善株式會社大阪支店 |
| 東京市神田區鍛冶町四番地   | 誠之堂伊藤岩次郎   |
| 東京市日本橋區通三丁目    | 丸善株式會社書店   |
| 東京市本郷區春木町二丁目   | 半田屋醫籍商店    |
| 東京市本郷區湯島切通坂町   | 南江堂小立鉦四郎   |
| 東京市淺草區西三筋町四七番地 | 金原直太郎      |
| 京都市三條通麩屋町      | 丸善株式會社京都支店 |
| 名古屋市中區池田町十二番地  | 竹田勇        |
| 福岡市博多上西町(電車通)  | 丸善株式會社福岡支店 |

本書購讀者には一大特典を附與す

細則は貳錢郵券封入申込むべし

## 本日鍼灸學教科書

前 再版既刊  
定 價 金壹圓七拾錢  
郵稅內地 金八 錢  
清朝臺灣 金叁 拾 錢

本書は著者が二十年來の實驗と十餘年に亘れる後進養成等の經驗に基づき、最新なる智識普及に努めんと欲し、心血を絞る多年其蓋蓄せる處を詳述し、記事簡明に失せず、繁に流せず、其必要なる部分を取捨撰擇し、何人にも理解し易く懇切周到に説明せり、特に解剖、生理學に通曉せしめんとため、原書に基づきたる精圖約壹百幅挿入したるが如き或は刺灸法並に鍼管挿入法等の圖畫まで挿入して讀者の理解に便ならしめたるが如きは近時續出せる此の種の書籍と大に其趣きを異にし、眞に斯界空前の大著述なり

從來本院教科書の筆記分與を請ふもの或は講義録として出版を望むもの頻々たり、旁々時代の要求を充さん、が爲め茲に上梓せるものなかるべし

本書の右に出づるものなかるべし

## 本日鍼灸學教科書

後 定 價 金貳 圓  
郵稅內地 金十二 錢  
清朝臺灣 金四 拾 錢

本書の内容は經穴學と病理學とに分ち、經穴學編に於ては大なる精圖を挿入し、之を解剖學に對照し、最も新奇にして然かも便益絶大なる取穴法即ち外表に現はる、突起隆起を基とし、位置を摸索する方法を詳細に説明し、病理解學編に於ては、其總論は簡明を尙び各論には、鍼灸術に最も適切緊要なる病症と將た亦禁忌すべき疾病とを鑑別し、一病毎に原因、症候、療法、刺灸點灸の要穴を記述したれば、讀者をして斯道の堂奥に到達せしむるを得ん

京都府技師鍼灸術試験委員  
大阪府技師鍼灸術試験委員  
大阪組合鍼灸會々長

井堤晴一先生題字  
上村行彰先生校閱  
山本新梧編纂

大增補第四版  
挿圖着色鮮麗

洋裝美麗金文字入  
紙數三百數十頁

# 各府縣 鍼灸術試驗問題解答集

天下 一品

本書は既往十年間に於ける各府縣の鍼灸術試験問題四百有餘を蒐集し之を解剖生理鍼灸及び病理學の各部に分ちて一々簡明適切なる解答を附し簡易を旨とし半假名を傍し婦女子に於ては易からしめ加ふるに全身血管同内臟同神經の着色精圖を挿入せり故に受験者一たび本書を繕く時は忽ち試験壇上合格者たるの月桂冠を得るは勿論鍼灸家其他何人たりと雖も亦机上の好侶伴たり

發行所

大阪西區江戸堀下通  
三丁目三十九番地

關西鍼灸學院出版部

大賣捌所

大阪南區鰻谷西ノ丁松村書店 ● 大阪東區博勞町四丸善書店  
東京神田區鍛冶町四丁目誠之堂書店其他 ● 便宜取次販賣依托ス

# 鍼灸術教授

本院ハ府縣廳ニ必要ノ實地ニ科及ビ實地技師及ビ實地技師ヲ養成スルニシテ鍼灸術ヲ養成セシメテ期スル規程書ヲ用テ方ハ二錢郵券封入申込ノ事

大阪市西區江戸堀下通三丁目  
可認 關西鍼灸學院

院主 大阪鍼灸會々長 山本新梧

● 入學期日ハ毎年三月九月ノ二回ナルモ臨時入學許容スルコトアルベシ

60  
別厚  
2/1

終

